

大学生における両親の期待度とその実現度の認知の比較

子 安 増 生 ・ 郷 式 徹

問 題

パーソナリティや学力の形成に対して、周囲の大人の期待が及ぼす影響は大きい。このことは、学校教育場面においては教師期待効果 (teacher expectation effect) と呼ばれ、詳しく研究されてきた (浜名・蘭・古城, 1988)。とりわけよく知られているのは、ピグマリオン効果 (Pygmalion effect) と呼ばれる教師期待効果である (Rosenthal & Jacobson, 1968)。Rosenthalらの実験では、アメリカの小学校において、学力診断検査の結果と称して実際にはそれと関係なく無作為に選んだ児童の名簿を教師に示し、その子たちが今後数か月の間に成績が伸びると伝えたところ、低学年では実際に統制群の児童よりも成績等が向上したという研究である。この研究の学術的評価については毀誉褒貶があるが (浜名他, 1988)、ピグマリオン効果実験の一つの問題点は、ここでいう教師期待が実験手続きによって人工的に導出された「期待」であり、実際の期待ではないという点にある。教師は、職業上、特定の子どもだけに大きな期待を寄せることはできない立場にあるということを考えると、教師期待を人工的に導出することは、今日の研究倫理基準に反するということが以前に、導出の妥当性においてもかなり無理のある設定と言える。

この意味において、教師期待よりも、両親の期待 (parental expectation) の方が日常的に接する親子関係の中で生ずる自然な感情をベースにしており、それが子どものパーソナリティや学力の形成に及ぼす影響はより大きいと考えられる。しかしながら、両親の期待に関する研究は、実証的研究論文が少ない上に、その研究方法も必ずしも洗練されているとはいえない。例として、最近の研究から3つの研究を取り上げよう。

Englund, Luckner, Whaley, & Egeland (2004) は、アメリカ・ミネアポリス市の低所得家庭の児童187人 (全員が長子) を対象とする縦断的研究によって、両親の教育関与と期待が、教師評定による学業成績に及ぼす影響を調べた。使用したデータは、出生から小学校3年までの縦断的調査のうち、小学1年と3年の時点で実施したものである。パス解析の結果、母親の学歴が小学校1年時の「両親の期待」の大きさに影響し、それが小学3年時の「両親の期待」の大きさにも影響するものの、「両親の期待」が学業成績に及ぼす有意な影響は見られなかった。この研究での「両親の期待」は、親に対して実施した半構造化面接において「お子さんの将来の進路は、どの学校段階までだと思いますか」と尋ね、「高校修了もしない」から「大学院または専門職大学院まで」の5段階評定で答えてもらうというものであった。すなわち、両親の期待尺度と言っても、実際は進路期待の1項目が含まれるのみであった。

Davis-Kean (2005) の研究は、1968年からアメリカで実施されている縦断研究のデータセットにもとづき、868人の12歳児データを抽出して分析が行われた。さまざまな指標について構造方程式モデルによって検討したところ、「両親の学歴」が「教育期待」に影響し、それが子どもの「読書経験」、ならびに親の「暖かさ」を介して、標準学力検査の成績に影響することが明らかになった。この研究における「両親の教育期待」の測定は、「お子さんの将来の進学は、どの段階までだと思いますか」と尋ね「11学年」から「博士号取得」までの8段階評定で答えてもらうというものであり、やはり進路期待の1項目が含まれるのみであった。

大学生を対象とするOishi & Sullivan (2005) の研究では、人生満足度 (life satisfaction) を研究する枠組みの中で、「両親の期待」についての測定が行われた。その研究1では、日本の大学生78人とアメリカの大学生114人を対象に、「人生満足度」、「自尊心」、「両親の期待充足度認知 (perceived fulfillment of parental expectations)」の3尺度の比較が行われた。その結果、この3尺度すべてにおいて、アメリカの大学生の平均得点は日本の大学生の平均得点よりも高いが、両群とも、「両親の期待充足度認知」の尺度と他の2尺度との間に有意な正の相関が見られた。研究2では、アジア系アメリカ人37人とヨーロッパ系アメリカ人37人との比較が行われ、同様の傾向が見出された。両親の期待がパーソナリティ形成に果たす役割は、子どもの場合だけでなく、大学生においても大きかったのである。この研究での「両親の期待充足度」の測定は、研究1では4項目（高校・大学、成績、大学での専攻、恋愛関係）の7段階評定、研究2では5項目（大学での成績、クラス、大学での専攻、友人、恋愛の相手）の7段階評定で行われた。このOishi & Sullivan (2005) の研究では、両親の期待の測定に複数の項目が用いられ、その尺度分析もきちんと行われているが、各項目の具体的内容は論文の中に明示されていない。

さて、筆者らは、放送メディアが子どもの発達に対してどのような影響を与えるかを調べるためにNHK放送文化研究所が中心となって平成14年から12年計画で川崎市において実施している縦断調査研究の「子どもにより放送」プロジェクトの研究メンバーとして、同研究プロジェクトに参加している (http://www.nhk.or.jp/bunken/research/bangumi/list_kodomo1.html)。その中で、両親の養育期待の調査を行うことを構想したが、それに適したよい尺度がないため、予備調査を行って、項目の選定を行う必要に迫られた。しかし、ただ予備調査として実施するだけでなく、項目の特性をより明確にするために、大学生から見た「両親の期待」の認知度と実現度の比較データを求めることにした。すなわち、「どのような子になってほしいか」についての両親の期待の認知度（幼少期の回想）と、大学生になった現在でのその実現度のずれを測定する尺度を作成し、そのずれの大きさの測定を試みるものである。

さて、一言で「どのような子になってほしいか」といっても、そこにはさまざまな要素がある。上述の Englund, *et al.* (2004) と Davis-Kean (2005) の研究は、「将来受ける教育がどの段階までか」という意味での進路期待を取り上げた。他方、Oishi & Sullivan (2005) の研究では、大学生の「両親の期待充足度認知」として、ほぼ現在のことが取り扱われ、内容的には学業関係（高校・大学での成績、大学での専攻など）と人間関係（友人、恋愛の相手）の2つの次元について調べられた。これに対して本研究では、大学生に対して「子どもの頃」両親がどのような子になってほしいと思っていたかという過去の期待を取り上げ、その内容として、対人的場面などで示される気質 (temperament) ならびにソーシャル・スキルに関わる項目を用意した。具体

的な項目の内容は、次の通りである。

1. 相手の立場にたてるやさしい子
2. 負けずぎらいの強い子
3. みんなと仲よくできる子
4. 自分の考えをつらぬける子
5. うそをつかない正直な子
6. うそも方便ということもわかる子
7. したいことは「したい」と言える子
8. したくないことは「いや」と言える子
9. したくてもがまんでできる子
10. したくないことでもできる子
11. きびきびした活発な子
12. じっくりとものごとを考える子
13. 細かなことに気がつく子
14. ものごとにこだわらない大らかな子
15. ユーモアが理解できる子

これらの項目を選定した理由は、まず気質やソーシャル・スキルを二項対立的に示したものと
して、「1. 相手の立場にたてるやさしい子」対「2. 負けずぎらいの強い子」、「3. みんなと仲よ
くできる子」対「4. 自分の考えをつらぬける子」、「5. うそをつかない正直な子」対「6. うそ
も方便ということもわかる子」、「11. きびきびした活発な子」対「12. じっくりとものごとを考
える子」、「13. 細かなことに気がつく子」対「14. ものごとにこだわらない大らかな子」の5対
を考えた。次に、「7. したいことは「したい」と言える子」、「8. したくないことは「いや」と
言える子」、「9. したくてもがまんでできる子」、「10. したくないことでもできる子」は自己主張
と自己抑制に関わるものである（鈴木・子安・安，2004）。最後に、関連項目として「15. ユー
モアが理解できる子」を追加した。

方 法

被験者 国立A大学の学生135人（平均19.6歳；SD=1.12）、および、国立B大学の学生46人（平
均18.9歳；SD=0.88）、合計181人を対象とした。性別の内訳は、男子82人（平均19.6歳；SD=
1.19）、女子99人（平均19.3歳；SD=1.01）であった。

材 料 上記の15項目を質問紙形式で提示し、「(1) あなたが子どものころ、自分の両親（また
はあなたの養育に最も関与してきた人）があなたにどんな子になってほしいと期待していたと思
いますか？ (2) そのことは今どの程度実現していると思いますか？」と文章で教示し、それぞ
れの質問について、「期待していたと思う（5）」～「期待していたと思わない（1）」、および、
「実現している（5）」～「実現していない（1）」の5件法で回答してもらった。

調査用紙は、A4判4ページ構成のものであり、大学の授業時間中に集団的に実施した。調査
は無記名で行われ、回答者の個人情報としては年齢と性別のみを尋ねた。

結 果

1. 各項目の基本統計量

まず、被験者の均質性を確認するため、学校差と性差について「期待」と「実現」の各15項目計30項目を従属変数、大学の違いを独立変数にした多変量分散分析を行ったところ、有意な群差は見られなかった (Pillai's trace ; $V=.235$, Wilks' lambda ; $\Lambda=.765$, Hotelling's trace ; $U=.307$, Roy's largest root ; $\Theta=.307$, すべて $p>.05$)。したがって、A大学とB大学の被験者で反応に違いがあるとは言えない。また、性別を独立変数にした多変量分散分析を行ったところ、有意な性差は見られなかった (Pillai's trace ; $V=.212$, Wilks' lambda ; $\Lambda=.788$, Hotelling's trace ; $U=.270$, Roy's largest root ; $\Theta=.270$, すべて $p>.1$)。したがって、男性と女性で反応に違いがあるとは言えない^{註1}。全体としては学校差と性差は見られなかったので、以後の分析においては、学校と性の条件を込みにして行った。

両親の「期待」と「実現」の各項目の回答の平均と標準偏差を表1に示す。また、「期待」と「実現」の各項目の回答の平均をグラフ化したものが図1である。両親の期待において「相手の立場にたてるやさしい子」、「みんなと仲よくできる子」、「うそをつかない正直な子」の評定値が高く、「うそも方便ということもわかる子」が特に低いことが特徴的である。

期待と実現という質問による違い、および、項目間の違いを検討するため、2 (期待, 実現) $\times$ 15 (項目) の2要因分散分析を行った。その結果、期待・実現の主効果 ($F(1, 180)=79.95$,

表1. 両親の期待と実現の各項目の回答の平均と標準偏差 (SD)

項目内容	期待		実現	
	平均	SD	平均	SD
1. 相手の立場にたてるやさしい子	4.36	0.92	3.37	0.84
2. 負けずぎらいの強い子	3.06	1.21	3.22	1.10
3. みんなと仲よくできる子	4.38	0.93	3.52	0.88
4. 自分の考えをつらぬける子	3.76	1.02	3.24	0.90
5. うそをつかない正直な子	4.33	1.01	3.20	0.98
6. うそも方便ということもわかる子	2.63	1.10	3.17	0.90
7. したいことは「したい」と言える子	3.68	1.00	3.22	1.00
8. したくないことは「いや」と言える子	3.57	1.14	3.06	1.02
9. したくてもがまんでできる子	3.77	1.07	3.37	1.02
10. したくないことでもできる子	3.84	1.08	3.15	0.99
11. きびきびした活発な子	3.93	1.11	3.20	1.09
12. じっくりとものごとを考える子	3.79	1.06	3.43	0.98
13. 細かなことに気がつく子	3.64	1.19	3.22	0.99
14. ものごとにこだわらない大らかな子	3.24	1.15	3.18	0.98
15. ユーモアが理解できる子	3.21	1.18	3.33	1.13

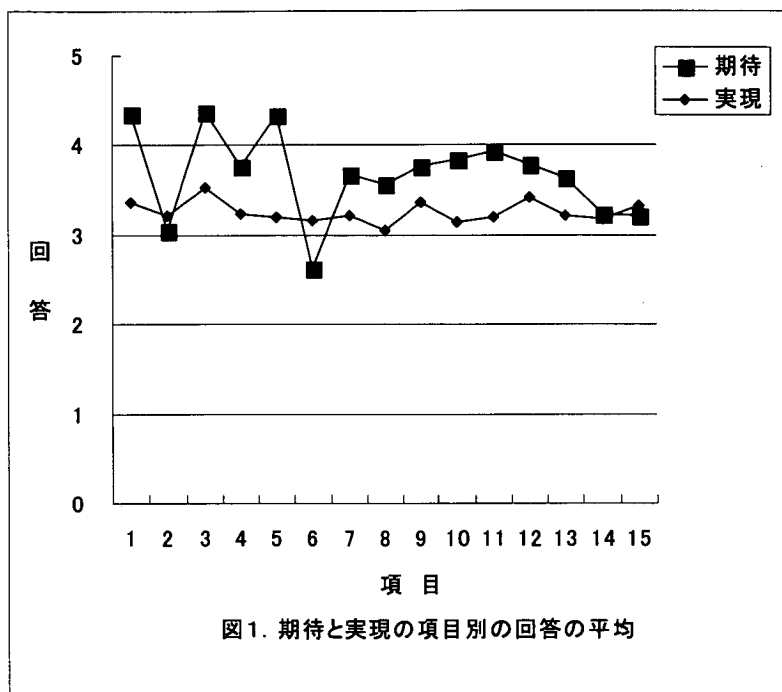


図1. 期待と実現の項目別の回答の平均

$p < .01$), 項目の主効果 ($F(14, 2520) = 29.02, p < .01$), 交互作用 ($F(14, 2520) = 29.23, p < .01$) が有意であった^{註2}。

交互作用が見られたので単純主効果の検定を行ったところ、項目2, 14, 15においては、「期待」と「実現」の間に違いが見られなかったが、他の12項目では有意差があった。なお、項目6でのみ「実現」が「期待」を上回ったが、その他の11項目では「期待」が「実現」を上回った。

また、「期待」の評定値では15項目の間に差が見られた ($F(14, 2520) = 53.68, p < .01$)。さらに、「実現」の評定値でも15項目の間に差が見られた ($F(14, 2520) = 3.46, p < .01$)。「期待」の評定値では項目1, 項目3, 項目5が4点台前半で評定値が高く、項目4と項目7から13が3点台後半、項目2, 項目14, 項目15が3点台前半、項目6のみ2点台といった順序であった。「実現」の評定値ではすべての項目が0.5点の幅 (3.06から3.52) の間にあり、対比較では項目差が見られるものの、15項目の間にほとんど差はないと判断しても差し支えないと思われる。

2. 因子分析による検討

項目間の関連、特に、各項目に影響する潜在因子を検討するため、探索的因子分析をおこなった。まず、全項目を分析の対象として、反復主因子法によって因子抽出を試みた。その結果、固有値が1以上および分散を説明する割合が5%以上という基準および固有値スクリープロットの変化から5因子構造が妥当と判断した。そこで再度5因子を仮定して反復主因子法、Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンを表2に、因子間相関を表3に示す。なお、回転前の5因子で30項目の全分散を説明する割合は48.7%であった。

表2. 因子分析の結果

番号	項目内容	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子
期待 5	うそをつかない正直な子	0.748	-0.077	0.081	0.075	-0.275
期待 3	みんなと仲よくできる子	0.689	0.087	-0.033	-0.151	-0.234
期待 1	相手の立場にたてるやさしい子	0.668	-0.047	0.172	0.091	-0.114
期待 4	自分の考えをつらぬける子	0.663	-0.206	-0.077	0.254	0.291
期待 11	きびきびした活発な子	0.622	0.299	-0.138	-0.180	0.043
期待 8	したくないことは「いや」と言える子	0.607	-0.145	-0.022	0.131	0.142
期待 12	じっくりとものごとを考える子	0.594	0.025	-0.103	-0.026	0.214
期待 13	細かなことに気がつく子	0.552	0.042	0.041	-0.029	0.131
期待 7	したいことは「したい」と言える子	0.548	-0.051	-0.046	0.174	0.141
期待 14	ものごとにこだわらない大らかな子	0.414	0.156	0.112	0.000	0.032
期待 10	したくないことでもできる子	0.390	0.012	0.045	-0.153	0.132
期待 9	したくてもがまんでできる子	0.387	-0.084	0.123	0.035	0.065
期待 15	ユーモアが理解できる子	0.382	<i>0.388</i>	-0.015	-0.170	0.281
実現 15	ユーモアが理解できる子	-0.108	0.633	0.108	0.095	0.085
実現 11	きびきびした活発な子	0.005	0.632	-0.110	0.073	0.067
実現 3	みんなと仲よくできる子	0.101	0.526	0.156	0.007	-0.149
実現 14	ものごとにこだわらない大らかな子	0.090	0.355	0.109	0.059	-0.155
実現 2	負けずぎらいの強い子	-0.076	0.324	0.084	0.070	0.144
実現 1	相手の立場にたてるやさしい子	-0.082	0.118	0.669	-0.070	0.008
実現 13	細かなことに気がつく子	-0.052	0.186	0.572	0.014	0.124
実現 9	したくてもがまんでできる子	0.194	-0.222	0.505	-0.047	0.064
実現 10	したくないことでもできる子	0.067	0.130	0.490	-0.097	<i>0.304</i>
実現 12	じっくりとものごとを考える子	-0.078	0.027	0.404	0.254	0.167
実現 5	うそをつかない正直な子	0.124	0.057	0.350	0.165	-0.138
実現 6	うそも方便ということもわかる子	-0.060	0.034	0.300	0.228	0.251
実現 8	したくないことは「いや」と言える子	0.086	0.089	-0.023	0.740	-0.128
実現 7	したいことは「したい」と言える子	-0.089	<i>0.445</i>	-0.102	0.631	-0.089
実現 4	自分の考えをつらぬける子	0.027	-0.025	0.042	0.517	0.041
期待 6	うそも方便ということもわかる子	0.171	-0.063	0.280	-0.102	0.497
期待 2	負けずぎらいの強い子	0.279	0.196	-0.148	0.049	0.437

表3. 因子間の相関

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子
第Ⅰ因子	1.000			
第Ⅱ因子	0.353	1.000		
第Ⅲ因子	0.219	0.329	1.000	
第Ⅳ因子	0.180	0.228	0.186	1.000
第Ⅴ因子	0.092	0.092	-0.118	0.188

表2に示されているように、抽出された5因子のうち、第Ⅰと第Ⅴの2因子は「期待」に関するもの、第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳの3因子は「実現」に関するもので、「期待」項目と「実現」項目はお互いに混ぜあわさることなく分離された。各因子の内容は、

第Ⅰ因子：「期待」の項目2と6を除いた残りの「期待」項目が集まる「一般期待因子」

第Ⅱ因子：「実現」の項目2, 3, 11, 14, 5 からなる「実現された積極性因子」

第Ⅲ因子：「実現」の項目1, 5, 6, 9, 10, 12, 13 からなる「実現された成熟性因子」

第Ⅳ因子：「実現」の項目4（自分の考えをつらぬける子）、項目7（したいことは「したい」と言える子）、項目8（したくないことは「いや」と言える子）からなる「実現された自己主張因子」

第Ⅴ因子：「期待」の項目2（負けずぎらいの強い子）と項目6（うそも方便ということもわかる子）からなる「特殊期待因子」

とまとめることができよう。図1からも明かなように、項目2「負けずぎらいの強い子」と項目6「うそも方便ということもわかる子」は、両親からの期待が特に低かった項目であり、「一般期待因子」に対する「特殊期待因子」ではあるが、その内実は「低期待因子」と言った方が実態に合っているかもしれない。

因子間の構造をさらに検討するために、Amos5.0を使用したSEMによる表2のパターン行列と同じ構造の検証的因子分析を行った。また、先の探索的な因子分析において「期待」項目と「実現」項目はお互いに混ぜあわさることなく分離されたことから、そもそも「期待」に関する因子（第Ⅰ因子、第Ⅴ因子）と「実現」に関する因子（第Ⅱ因子、第Ⅲ因子、第Ⅳ因子）にはより高次の潜在因子が存在する可能性が考えられる。そこで、第Ⅰ因子と第Ⅴ因子に影響を及ぼす「期待」因子と第Ⅱ因子、第Ⅲ因子、第Ⅳ因子に影響を及ぼす「実現」という高次の潜在因子を構造に含む2次の因子モデルを構成した。さらに、そもそも「期待」が存在し、その「期待」に基づいてさまざまな側面が「実現」していると考え、「期待」に関する潜在因子から「実現」に関する潜在因子への回帰的な因果関係を含むモデル（多重指標モデル；涌井・涌井, 2003）を検討した。ただし、表3で示されたように「特殊期待」（第Ⅴ因子）は「一般期待」（第Ⅰ因子）および「実現」因子（第Ⅱ～Ⅳ因子）と相関が低いことから、多重指標モデルにおいては「特殊期待」に関する構造を除いた「多重指標モデル（共分散なし）」を構成した。表4に示した適合度指標から、検証的因子分析モデルと2次の因子モデルより多重指標モデルのGFI, AGFIが少し大きく、AICが小さいことから「多重指標モデル（共分散なし）」が他の2つのモデルと比べてより妥当性を備えたモデルであるといえよう。

表4. 各モデルの共分散構造分析の結果（適合度指標）

モデル名	GFI	AGFI	AIC	RMSEA
検証的因子分析	0.750	0.706	1101.386	0.089
2次の因子モデル	0.750	0.711	1090.328	0.088
多重指標モデル（共分散なし）	0.759	0.718	987.799	0.091
多重指標モデル（一次因子共分散有り）	0.767	0.725	945.600	0.088
多重指標モデル（一次因子・誤差共分散有り）	0.798	0.755	825.174	0.076

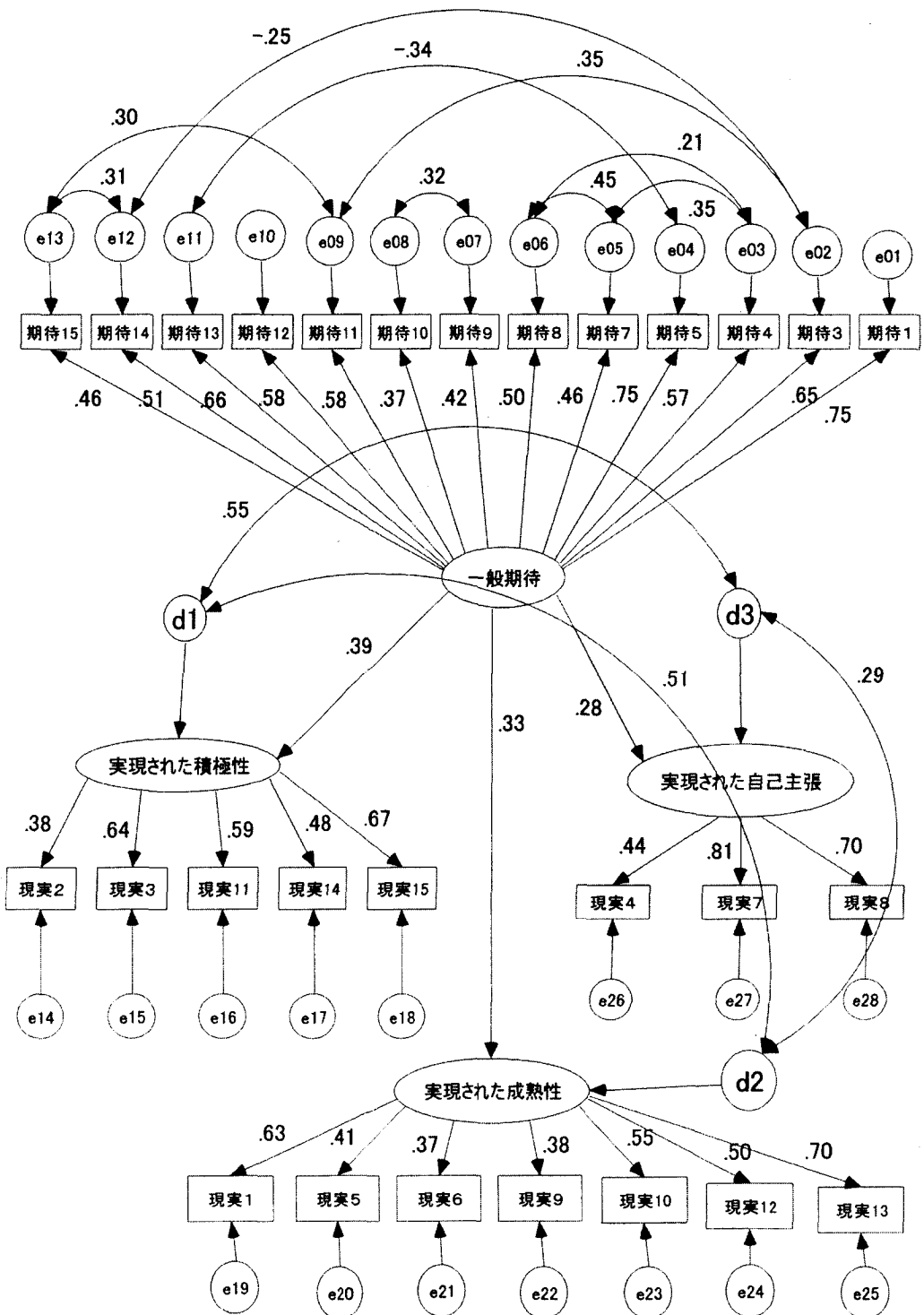


図2. 多重指標モデルの結果 (標準化解)

しかし、「多重指標モデル（共分散なし）」でもそれほど適合度が高いとは言えない。これは「一般期待因子」が実現の3つの一次因子（「実現された積極性因子」「実現された成熟性因子」「実現された自己主張因子」）を完全に説明できていないため、すなわち、3つの一次因子間偏相関が残るためかもしれない。そこで、多重指標モデルの実現の一次因子の攪乱項に共分散を設定した「多重指標モデル（一次因子共分散有り）」を構成した。さらに、期待項目のほとんどは一つの因子（「一般期待因子」）で説明されているが、実現項目は3つの因子で説明されている。期待項目も実現項目に対応する3つの因子で説明される可能性を考え、「実現された積極性因子」の項目に対応する期待項目3, 11, 14, 15の誤差の間に共分散を設定、「実現された成熟性因子」の項目に対応する期待項目1, 5, 9, 10, 12, 13の誤差の間に共分散を設定、「実現された自己主張因子」の項目に対応する期待項目4, 7, 8の誤差の間に共分散を設定した「多重指標モデル（一次因子・誤差共分散有り）」を構成した。ただし、誤差共分散のうち5%水準で有意でないものについて除いた図2のモデルを検討した。表4に示した適合度指標から、「多重指標モデル（一次因子・誤差共分散有り）」のGFI, AGFIが最も大きく、RMSEAが最も小さい。また、他のモデルよりもAICが小さいことから「多重指標モデル（一次因子・誤差共分散有り）」が表4の5つのモデルの中では最も妥当性を備えたモデルであるといえよう。

考 察

本研究は、対人的場面などで示される気質ならびにソーシャル・スキルに関わる「両親の期待」尺度を構成するため15項目を用意し、「子どものころ・・・どんな子になってほしいと期待していたと思いますか」（期待度）と「そのことは今どの程度実現していると思いますか」（実現度）という2種類の5段階評定を行わせる調査を大学生181人に実施した。

「期待度」は子ども時代のことを思い出して想起されたものであり、「実現度」は現実の自分が想像によって推測されたものであるから、いずれも回答者の主観的な認知に基づいている。したがって、それぞれがどの程度真実であるかという問いはあまり意味がなく、両者の食い違いがどのように生じているかが重要である。期待度において高かったのは「相手の立場にたてるやさしい子」、「みんなと仲よくできる子」、「うそをつかない正直な子」という「いい子」志向の項目であり、高い期待度と低い実現度という結果になった。他方、「うそも方便ということもわかる子」は期待度が最も低い、実現度はそこそこであった。ことさら親に言われなくても、人生においていやでも直面せざるをえないのが「うそも方便」である。「負けずぎらいの強い子」についても、多少似たような傾向が見られた。

全15項目の探索的因子分析の結果は、期待項目群と実現項目群をはっきり二つのグループに分けるものであった。すなわち、期待については「一般期待因子」と「特殊期待因子」の2因子、実現については「実現された積極性因子」、「実現された成熟性因子」、「実現された自己主張因子」の3因子が抽出された。期待の項目と実現の項目が入り混じらなかったこと、および、それぞれの因子における項目のまとまりは理解しやすいものと思われる。

探索的因子分析によって同定された潜在因子の構造をさらに検討した結果、潜在因子間の相関関係を想定する因子分析モデルよりも「期待」に関する潜在因子（一般期待因子）から「実現」

に関する潜在因子（実現された積極性因子、実現された成熟性因子、実現された自己主張因子）への因果構造を含むモデル（多重指標モデル）の方がやや適合性が高かった。ただし、「一般期待因子」が「実現」に関する潜在因子を完全に説明できるわけではなく、「実現」に関する潜在因子間に偏相関が存在する。また、「期待」に関する項目（2と6を除く）が「一般期待因子」というただ一つの因子で完全に説明されると考えるよりも、「期待」に関する項目間に「実現」に関する潜在因子と一部対応するような関係が存在すると考えたほうが妥当だと思われる。いずれにせよ、「期待度」と「実現度」のどちらも回答者の現在の主観的な認知に基づいているが、回答者の心的な構造としては、「期待度」に基づいて「実現度」が生じているという、主観的ではあるが因果的な理解がなされている可能性を示すものといえよう。また、項目2と項目6を除いた「期待」に関する項目は、「実現」に関する項目ほど明確ではないが、積極性、成熟性、自己主張の3つに分けられるような構造を内包している可能性が示唆されたにもかかわらず、単純に「期待された積極性」が「実現された積極性因子」を、「期待された成熟性」が「実現された成熟性因子」説明するのではない、すなわち、期待と実現が完全に対称構造でもなく、完全に非対称な構造でもないという点は興味深い。

なお、今回分析を行ったデータでは、「期待」の項目1（相手の立場にたてるやさしい子）、項目3（みんなと仲よくできる子）、項目5（うそをつかない正直な子）、項目11（きびきびした活発な子）において「平均値+1SD」が上限値の5を越えており、所謂天井効果が見られた。本来、天井効果の見られる項目は分布の歪みが予想されるので分析から除くことが望ましい。しかし、本研究の場合、明らかにポジティブな「期待」を親が否定していたと考えることはほとんど考えられない。そのため、上記の4項目においてある程度の回答の偏りが生じることは致し方ない（小塩、2005参照）。また、同じ内容について「期待」と「実現」という対になった質問をしていることから、上記の4項目において「期待」に対する質問への回答だけを除くことは妥当ではないと考え、「期待」と「実現」の各15項目を対象に分析を行った。ただし、このことが分散分析における球面性の仮定の棄却、探索的因子分析での（累積）寄与率の低さ、共分散構造分析での適合度指標の低さにつながった可能性は否定できない。

最後になるが、両親の期待度と実現度のズレを調べる研究およびその手続きは、理想自己（ideal self）と現実自己（real self）のズレを調べる研究およびその手続きとの類縁性がある。理想自己と現実自己は、共に現実の自分が想像によって推測されたものであるから、いずれも回答者の主観的な認知に基づいている。したがって、この場合もそれぞれがどの程度正しいかという問いではなく、両者の食い違いがどのように生じているかが問われるべきである。

たとえば、松岡（2006）は、15歳から86歳までの男女865名を対象に理想自己と自尊感情の生涯発達を調べ、自尊感情は生涯維持され、理想－実現自己のズレは年齢と共に減少すること、青年期から老年期までのすべての群で理想－実現自己のズレと自尊感情との間に有意な負の相関関係がみられズレの減少と自尊感情の維持とに関連性があることなどを明らかにした。

両親の期待度と実現度のズレは自己認知の重要な要素であり、パーソナリティや学力の形成に大きな影響を及ぼすと考えられ、その生涯発達を調べる研究の重要性は今後ますます高まっていくであろう。

註1：学校差と性差について項目ごとに1要因2条件（大学；A-B，性別；男-女）の分散分析を行った場合，学校差については「実現」の項目3（A大学3.41 [SD=.87]，B大学3.85 [SD=.84]； $F(1, 179)=8.68, p<.01$ ）と項目11（A大学3.10 [SD=1.05]，B大学3.48 [SD=1.15]； $F(1, 179)=4.14, p<.05$ ）において，A大学よりもB大学の平均値の方が高かった。性差については「実現」の項目5において，男性よりも女性の平均値の方が高かった（男性2.99 [SD=1.01]，女性3.37 [SD=.92]； $F(1, 179)=7.20, p<.01$ ）。

註2：表1のデータは球面性が仮定できない（Mauchlyの球面性の検定を用いた場合）ため，分散分析においては本来Greenhouse-Geisserの ε による修正かHuynh-Feldtの ε による修正を行うべき（石村，1997；小塩，2004）だが，これらの修正を行っても，自由度は変わるが結果は変わらないので，通常の計算法による結果を記載した。

【謝 辞】

本研究の共分散構造分析につきまして、大阪大学大学院基礎工学研究科・狩野裕教授から貴重な助言をいただきました。ここに記して、心より感謝申し上げます。

文 献

- Davis-Kean, P.E. (2005). The influence of parent education and family income on child achievement: The indirect role of parental expectations and the home environment. *Journal of Family Psychology*, 19, 294-304.
- Englund, M., Luckner, A., Whaley, G., & Egeland, B. (2004). Children's achievement in early elementary school: Longitudinal effects of parental involvement, expectations, and quality of assistance. *Journal of Educational Psychology*, 96, 723-730.
- 浜名外喜男・蘭千壽・古城和敬 (1988). 教師が変われば子どもも変わる一望ましいビッグマリオン教育のポイント. 北大路書房.
- 石村貞夫 (1997). SPSSによる分散分析と多重比較の手順. 東京図書.
- 松岡弥玲 (2006). 理想自己の生涯発達——変化の意味と調節過程を捉える——. *教育心理学研究*, 54, 45-54.
- Oishi, S., & Sullivan, H.W. (2005). The mediating role of parental expectations in culture and well-being. *Journal of Personality*, 73, 1267-1294.
- 小塩真司 (2004). SPSSとAmosによる心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで—. 東京図書.
- 小塩真司 (2005). 研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析. 東京図書.
- 鈴木亜由美・子安増生・安 寧 (2004). 幼児の意図理解と社会的問題解決能力の発達——「心の理論」との関連から. *発達心理学研究*, 15, 292-301.
- Rosenthal, R., & Jacobson, L. (1968). *Pygmalion in the classroom: Teacher expectation and pupils' intellectual development*. New York: Rinehart and Winston.
- 涌井良幸・涌井貞美 (2003). 多重指標モデルと共分散構造分析 涌井良幸・涌井貞美(著) 図解でわかる共分散構造分析. 日本実業出版社.

(子安増生：教育認知心理学講座 教授)

(郷式徹：静岡大学教育学部 助教授)

(受稿2006年9月8日、受理2006年12月7日)

Recalled Parental Expectations and the Degrees of Their Perceived Fulfillment by University Students

KOYASU Masuo & GOUSHIKI Toru

The present study investigated discrepancies between recalled parental expectations and degrees of their perceived fulfillment by university students. Participating were 181 students from two Japanese universities, 82 males and 99 females, mean age 18.9. They were asked to fill out a questionnaire of 15 items on a five-point rating scale. Each item was structured in the same way with the use of two questions: "When you were a child, did your parents expect you to ... ?" and "Do you think that you have fulfilled their expectations?" The mean fulfillment score was higher than the expectation score on 12 items. The largest discrepancy appeared in the item "understand that a lie may sometimes be excused," in which the recalled parental expectation was low and the degree of perceived fulfillment of it was higher. An exploratory factor analysis was conducted on the 15 items, each with the two questions, and five factors were extracted: two on expectation items (General and Special), and three on fulfillment items (Activeness, Maturity, and Assertiveness). No factor was found in which expectation and fulfillment items mixed. A structural equation modeling showed a valid structure of these factors, except for Special Expectation.